

賢者の贈り物・冬の公園で

【人物一覧表】

若林：…男。20代後半。サラリーマン。

倉田：…女。20代後半。若林の元同級生（高校）。売れないシンガーソングライター。

○シーン1…公園（夕方〜夜）

公園の遊具にもたれて缶ビールを飲んで
いる若林と倉田。

若林、空を見ている。

若林モノ「例えば10年前の今日、俺は何を
していたか、思い出せることなんてない。

10年前、高校生だった俺。ふんわりと舞う
埃のように、小さく漂っていた俺。ただ一
つ、10年前から今日まで、こいつとこんな
に近い距離で寒さを分け合った経験なんて
一切無かったことは断言できる。」

若林、横にいる倉田に視線を送る。倉
田、若林の顔をまじまじと見る。

倉田「若林ってさー、顔変わんないねえ。一
目ですぐ分かったわ。」

若林「そうかな？そっちは雰囲気変わったよ
ね、全然気付かなかった。」

倉田「さっき声かけたら、キョトンとしてた
もんねー。あ、いる？」

倉田、若林にビーフジャーキーを示す。

若林「ああ、ありがとう。」

若林、ビーフジャーキーを貰う。

若林「いつもこんな風に飲んでるの？」

倉田「ううん。私酒弱いし、普段は飲まん。」

若林「じゃあ今日は飲みたい気分だった？」

倉田「うん。誰かと話したかった。いやマジ

今日若林と遭遇したの奇跡。」

若林「そっか、・・・失恋？」

倉田「んー、近いような・・・いや、全然近くな
いわ。」

若林「なんだそれ。(笑)」

倉田「ねえ若林さあー、最近幸せ感じてるー？」

若林「ええ？・・・どうだろう、なんか俺って幸

せ似合わないから。」

倉田「なにそれー、仕事とか上手くやってん
の？」

若林「んー、・・・こう、人の親切を全て仇で返
しちゃってるみたいな、そんな感じ。根性
無いからさ、俺。」

倉田「・・・どうした？何かあった？」

若林「いや、別に。ただ何だろう、満員電車に毎日乗っていると、自分の存在意義が押しつぶされちゃうみたいなの、そんな感じだから、幸せっていうのがピンとこないみたいな。」

倉田「そっかー…病んでるねえ。もうさ、僕は根性ないんで何も出来ません！って上司に言ったら？」

若林「それ言える時点で根性あんだろ。(笑)」

倉田「それな。(笑)」

若林「倉田は…(倉田の脇のギターケースを見て)もしかしてバンドやってんの？」

倉田「あー、一応、シンガーソングライター。」

若林「え！凄いいじゃん。」

倉田「そんなんじゃないよ。」

若林「どういう系？」

倉田「アコギをシャカってるだけ、普通に。」

若林「何だよ、めっちゃカッコいいじゃん。」

倉田「(軽く苛立ちながら)だからそんなんじゃないってば。(缶ビールが空になり)あー

そろそろ行こっか。」

若林「あつごめん……。何か気に障ること言っちゃった？」

倉田「あーいや、普通に寒いだけ。しかし何だ、あんたとこんな風に喋ったの初めてだよね。昔は特に接点なかったし。」

若林「てかごめん、ビール代払う。」

倉田、財布を出そうとする若林を手で制する。

倉田「だったらさ、来週の25日の夜空いてる？」

若林「まあ、うん。」

倉田「ならば、またここで飲もうよ。お代かわりに。」

若林「いいけど……。」

倉田「おっけ、じゃあまた来週ー。」

倉田、さっさと側に停めてた自転車を押し出す。

倉田「またね卓球部。」

若林「……じゃあな、軽音部。」

○シーン2…公園（夜）

一週間後、12月25日。同じく公園で

飲む若林と倉田。

倉田「メリクリー。」

若林、倉田と乾杯。

若林「あのさ、今日指定したのってなんか理由あるの？いや、クリスマスってのはもちろん知ってるけど。」

倉田「単刀直入だね。（笑）えー…（ちよつと思案）私さー、今日で引退なんだー。てゆーか、事務所クビになっちゃった。」

若林「…え、えええ？？はああ？？本当に？え、今日にした理由それ？」

倉田「そーだよ。」

若林「いや事前に教えてよ…。」

倉田「言っただーすんのさ。より惨めになるだけじゃん。それよりはいい、クリスマスプレゼント。」

倉田、若林に鍵を渡す。横の自転車を

顎で指す。

倉田「ほぼ新品！いらなかったら捨ててく
ださい。」

若林「え、自転車？」

倉田「私もう乗らないし。(にやりと笑い)満
員電車に乗らないで済むよ。」

若林「あ、…：それなんだけど…：その、俺転勤
することになっちゃって。」

倉田「え、マジ？」

若林「その…：前話した、俺は根性なしでちよ
っともう無理だったこと、言ってみて。そ
したら、一旦環境変えてみるかって、年明
けて暫くしたら福岡に。」

倉田「え、なに本当に言ったの！？ヤバいじ
ゃん凄いいじゃん！」

若林「恥ずいって。(笑)」

倉田「そっかー、にしても急な話だねえ。じ
ゃあ二人ともここから離れちゃうんだね。
私も年明けに引っ越すからさ。」

若林「え、マジで？」

倉田「そうー、うちの彼氏が仙台いるからさ、
そっち行って、とりあえずちゃんと人間と
して生活しようって。(笑)」

若林「なんだよそれ：。」

倉田「ほんと今めっちゃ断捨離してる。ギター
も売ったし、この身一つで新天地よ。」

若林「そつか：えっ、ちょっと待った、ギタ
ー売っちゃったの!？」

倉田「そうだよ。邪魔だし、持っても何か
未練たらしいじゃん。どーせ弾きたくなつ
たら新しいの買えばいいんだし。」

若林「なんだよそれ：。」

若林、倉田、酒を飲み切る。

倉田「あ、なくなっちゃった。じゃあー寒い
し、私そろそろ行くわー。クリスマスにあ
りがとうね。ほんと若林も福岡で元気でや
んなよー?次いつ会えるかわかんないけど、
お元気で！」

若林「んー：。」

倉田「あ、てか自転車、マジでいらなかった

ら年内だったら私で処分するから、連絡ちよーだい。」

若林「あーまあ、とりあえず貰っとく。」

倉田「そか、じゃーね、達者でねー、卓球部。」

幸せになれよー！」

若林「…じゃあな！軽音部。」

倉田、両手を広げてふざけながら走り去っていく。見送る若林、手元のカバンの中から倉田へのプレゼント用にとっさり買っていたギターのピックを出す。

若林「クソ、何だよ、一人でどんどん行きやがって。勝手に幸せになっちまえ。俺も勝手に幸せになっやる。」

(完)